

透谷全集

第二卷

透谷全集 第二卷(全三卷)

昭和二十五年十月三十一日 第一刷發行
昭和四十九年七月 十日 第十四刷改版發行 ©

定價千八百圓

編者 勝本清一郎

發行者 岩波雄二郎

發行所 株式會社 岩波書店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

三陽社印刷・松岳社製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

評論及び感想(二)

各人心宮内の秘宮	三
心機妙變を論ず	一五
處女の純潔を論ず	二五
他界に對する觀念	三五
秋窓雜記	四五
文界要報	五一
「默」の一字	五四
花浪生の快言	五七
鬼心非鬼心	五九

「關ヶ原譽凱歌」	奎
虛榮村の住民	奎
「然」と「否」	兗
「餓」	七〇
博奕の精神	七一
歴史上の博奕	七三
文界近狀	七六
正太夫と流行子	七六
「罪と罰」	七九
ツルゲネーフの小品	八三
「罪と罰」の殺人罪	八五
「尾花集」	九一
心の死活を論ず	九三
富嶽の詩神を思ふ	九六
閑窓茶話	一〇三

「和文學史」	一〇七
「風の糸目」	一一一
小説「花相撲」	一一三
人生に相渉るとは何の謂ぞ	一一三
山庵雜記	一二六
「詩篇若葉」	一三一
想像と空想	一三三
基督教内の偶像教	一三四
海軍の擴張	一三五
單純なる宗教	一三六
心池蓮	一三八
五羅漢の贊	一四〇
明治文學管見	一四六
一、快樂と實用	一四六
二、精神の自由	一五九

三、變遷の時代	一六七
四、政治上の變遷	一七四
文界時事(1)	一七九
今日の基督教文學	一八三
文界時事(2)	一八七
對花小錄	一九〇
満足	一九六
復讐・戦争・自殺	二〇三
井上博士と基督教徒	二〇九
傳道師の將來	二二三
組合教會と宣教師	二二六
文界時事(3)	二二八
「國民之友」對自由黨	二三一
頑執妄排の弊	二三四
人生の意義	二三九

賤事業辨	三三五
内部生命論	三三八
「靜思餘錄」を読む	三五〇
熱意	三五五
「腓立比物語」 ^{ヒリップ} を読む	三六〇
文界時事(4)	三六二
偶思錄	三六四
國民と思想	三六七
文界時評	三八〇
客居偶錄	三八四
三浦泰一郎君	三九一
「桂川」(吊歌)を評して情死に及ぶ	三九三
情熱	三九七
哀詞序	三〇三
思想の聖殿	三〇七

兆民居士安くにかある	三〇
萬物の聲と詩人	三二
心の經驗	三九
漫罵	三四
一夕觀	三八
蟲韻些語	三一
劇詩の前途如何	三三
慈善事業の進歩を望む	三四二

小説

我牢獄	三五一
星夜	三五九
宿魂鏡	三七一

戲曲

惡夢……………三九九

解題（勝本清一郎）……………四一九

風流……………四六四

「風流」解題（勝本清一郎）……………四六五

評論及び感想
二二

各人心宮内の秘宮

各人は自ら己れの生涯を説明せんとて、行爲言動を示すものなり、而して今日に至るまで眞に自己を説明し得たるもの、果して幾個かある。或は自己を隠匿し、或は自己を吹聴し、又た自らを誇示するものあれば、自らを退讓するものあり、要するに眞に自己の生涯を説明するものは尠なきなり。

哲學あり、科學あり、人生を研究せんと企つる事久し、客觀的詩人あり、主觀的詩人あり、千里の天眼鏡を懸て人生を觀測すること既に久し、而して哲學を以て、科學を以て、詩人の靈眼を以て、終に説明し盡すべからざるものは夫れ人生なるかな。

厭世大詩人バイロンが「我は哲學にも科學にも奥玄なところまで進みしが、遂に益するところあらざりし」と放言し、萬古の大戲曲家シェークスピアが「世には哲學を以ても科學を以ても視ひ見るべからざるものあり」と言ひたりしも、又た學問復興の大思想家と人の言ふなるべし。

コンが「哲學遂に際涯するところあらざるべし」と戯れたるも、畢竟するに甚深甚幽なる人間の生涯をいかんともすべからざるが爲めならんかし。

人生はまことに説明し得べからざるものなるか。好し左らば、人生は暗黒なる雲霧の中に埋却すべきものとせんか。何物とは知らず吾人の中に、斯くするを否むものあるに似たり。

人の本性を善なりと認めたる支那の哲學者も、人の本性を惡と認めたる同じ國の哲學者も、世界を樂天地と思ひ定めしライブニッツも、世界を苦婆娑と唱へたるシヨツベンホウエルも、或は善の一側を觀じ、或は惡の一側を察し、或は樂境を睥目し、或は苦界を睨視したるものにして、是等大思想家の知り得たるところまでは確實なれども、なほ知り得べからざる不可覺界のひろさは、幾百萬里程なるべきか。眞理は實に多側なり。神の面は一なれど、之を見るものゝ眼によりていかやうにも見ゆるものなるべけれ。深山に分け入りて蹈み迷ふは不案内の旅客なり、然れども其出で來る時には、必らず深山の一部分を識得して之を人にも語り、自らも悟るなり、眞理を尋究する思想家の爲すところ、亦た斯の如くなるべけん。

深山に蹈入る旅客なかるべからざるが如くに、眞理に蹈迷ふ思想家もなかるべからず。人間は暗黒を好む動物にはあらざるなり、常久不滅の靈は其故郷を思慕して、或時に於て之に到着せん事を必するものにてあればこそ、今日に到るまで或は迷信に陥り、或は光明界に出で、宗教の形、

哲學の式、千態万様の變遷を経たるなり。人性に具備せる戀愛の如き、同情の如き、慈憐の如き、別して涙の如きもの、深く其至粹を窮めたるものをして造化の妙微に驚歎せしめざるはなし。蠻野より文化に進みたるは左までの事にあらず、この至妙なる靈能靈神を以て遂には獸性を離れて、高尚なる眞善美の理想境に進み入ること、豈望みなしとせんや。

歐洲の理想界に形而上派の興りてより、漸くにして古代の崇高なるプラトニックの理想的精神を復活せしめ、爾來歐洲の宗教界、詩文界に生氣の活動し來りたるを見る。律法儀式にのみ拘泥したる羅馬教の胎内よりプロテスタニズム生れ出で、プロテスタニズムよりビュリタニズム生じ、ビュリタニズムによりて、長く人心を苦しめたる君主專制の陋弊を破りたる自由の思想の威靈あるものを奮興したり。或は一轉して舊來の迷夢を攪破したるボルテアとなり、バイロンとなり、ゴエテとなり、カアライルとなり、自由神學派となり、唯心的傾向となりて、今日に至るまでの思想界の變遷はおもしろきこと限りなし。

然れども凡て是等の變遷を貫ぬける一條の絃の存するあるは、識者の普ねく認むるところなり。之を何とか爲す、曰く、皮想的信仰破れて、心を以て基礎とする思想及び信仰の漸く地平線上に立ち上りて、曙光炳灼たるものある事はれなり。凡ての批評眼を抉り去りて後に聖經を解かむとするは、むかし羅馬教の積弊たりしものを受けて今日の淺薄なる聖經の讀者が爲すところなり、

心を以て基礎とし、心を以て明鏡とし、心を以て判斷者となし、以て聖經に教ゆるところを行はんとするは、最近の思想を奉じ自由の意志に従ひて信仰を形くるものなりけり。

人世は遂に説明し得べからざるものなり、然らば人生を指導するものも亦た、遂に解釋し盡くす能はざる程の寶藏にあらざれば、可なるところを知る能はず。數間の地を測るには尺度にて足るべし、天下の大を度るには、人造の尺度果して何の用をかせむ。もし聖經の教ゆるところ、單に消極的の殺快樂（或は克己）に止まらば、聖經も亦た古來幾多の思想界の階段の一となるの歴史上の價値を得るのみにして、止まんのみ。

或は利得の故に教會に結び、或は逆遇に苦しみて教理に歸依す、是の如きは今日の教會にめづらしからぬ實狀なり。もし夫れ人間の本性が全く教理を認めたるものならば、或は利得を取り或は歸依をなす元より自由にてあれど、苟くも其發心の一瞬間に卑劣なる慾情の混り居らば、其教會の汚濁、實に思ふべきなり。然れども基督の本旨は善人を救ふにあらず、不善を善に回へすにあれば、われは始めに染汚の慾情を以て入り來りしものも、後には極めて淨潔なる聖念に満たさるゝ様にならん事を願ふなり。

パプテスマのヨハネは基督の爲に道を備へんとて遣はされたり。道を備ふるとは何ぞ。曰く、人々を悔改に導くなり。悔改とは何ぞ。曰く、不善に向ひたる靈性を善に向はしむるなり。

不善の行爲は適ま不善の實象を現するに過ずして、心の上にあらはれたる一黒點に外ならず。不善の行爲を廢めて善の行爲をなすも亦た、心の上にうつりたる一白點に外ならず。共に心の上にはあらはるゝものにして、心ありて後に善もあり不善もあり、心なければ何を悔改むるところとせむ。

心こそ凡てのものを涵する止水なれ。迷ふも茲にあり、悟るも茲にあり、殺するも仁するも茲にあり、愛も非愛も茲にこそ湛ふるなれ。ヨハネの所謂悔改とは、即ち心を直くするにあり、ヨハネの所謂道を備ふるとは、即ち心を虚うするにあり、心を虚うする後にあらざれば、眞理は望む事を得べからざればなり。基督教に於て心を重んずる事斯の如し。唯だ夫れ老莊の、心を以て太虚となし、この太虚こそ眞理の形象なりと認むる如き、又は陽明派の良知良能、禪僧の心は宇宙の至粹にして心と眞理と殆一軀視するが如きは、基督教の心を備へたる後に眞理を迎ふるものと同一視すべからず。

以上は「心」に就きて説きたるまでなり、いでわれは是よりわが感得したるところを述て、心宮内の秘殿を論ぜむ。

聖經はエルサレムの神殿を以て神の座すところとせり、其神殿に聖所あり、至聖所あり、至聖所には祭司の長の外之に入ることを得るもの甚だ稀なりと傳ふ。われ惟へらく、人の心も亦た斯